

四季の庭・四季の道

正月の花

浅山 英一

一年中でいちばん心が改まるのは正月です。床の間にメ飾り、三宝の台にはウラジロやユズリハが葉を広げ、鏡餅が重ねられている情景は、どこか家庭にも、会社などの事務所などにも見られます。これは日本にしか見られない新年特有のデコレーションです。

玄関先にはタケとマツ。庭にはハボタンの寄せ植。テラスには小さなマツとフクジュソウを植え

て白砂を敷きつめた平鉢などが置かれているのを見ると昔からのしきたりに厳肅な思いが湧いてきます。

冬は花が無いからなどと言わないで、庭の片隅に茂っているハランの株をさぐり掘って見ると土に埋もれて八枚弁のチューリップのような花が咲いています。

庭の植え込みには雌雄異株のアオキの紅い実が

輝き、ヒヨドリ的好餌ピラカンサやマンリョウ、センリョウの実もたわわについています。

正月は花も実もないから子ども達にはつまらないとは言わせません。

それに加えること、花店には色とりどりの草花がいっぱいです。スイートピー、パンジー、プリムラ、シャコバサボテンなど香りと色にとまどいするばかりです。

子どもたちに花と植物に親しみを持たせる絶好のシーズンとも言えるわけですから、前以て自らよく調べ、持参したものを前にいろいろの説明ができるようにしておきたいことです。

苗の植えかた、育てかたなど栽培の面や葉や花の色、形など植物学的なことにも軽くふれることのできるチャンスです。

ふつう三月に咲くフクジュソウやプリムラなどがどうして真冬に咲くのかと質問が溢れることで

しょうが、温度と日照時間の然らしむることなど冬なればこそ話になる機会ですから、作業はさておいても花と植物の話はずませせてよい筈です。

春の七草

折しも正月は七草の節句です。「セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロこれや七草」とうたわれた七草の行事の縁起は古くてわかりませんが、正月七日に七草粥として食べる習慣は緑黄色野菜のない時代に山野に僅かに萌える雑草のうちから七種を選んで欠乏したビタミンを摂ること



が考えられたあらわれとされます。

小倉百人一首に、

君がため 春の野にいでて 若葉つむ

わが衣手に 雪はふりつつ 光孝天皇

とありますが摘んだ若葉は七草であったと思われる
ます。

江戸時代には五節句の一つとして公式に定められた七草には、栗、串柿、ニンジン、ゴボウ、大根、タラの芽なども用いられ、正月六日の夜や七日の早朝にマナ板の上で包丁、スリコギ、火箸など叩きながらやした唄は今も伝えられています
が、同名異人ならぬ異植物です。

七草のプロフィール

セリ

日本中どここの田や小川のほとりにも生えている
セリ科の多年草で、秋に根際から出る走茎の先端

から出る新苗を食用としますが、春先に出るものが軟らかく香りもよいので、浸しもの、和えものによろこばれます。ミツバによく似ていますが多分に水を要するので栽培するときには水をたたえた水田を利用し、次第に水位をあげて三〇センチほどに軟白するようにしています。

茎葉一〇〇グラムは二十二カロリ、ビタミン含量はB₁が〇・〇四ミリグラム、Cは五・五〇ミリグラムありますが茹でてしまうとかなり失われてしまいます。

セリによく似た大型のドクセリには猛毒があるので誤って採らないようにすることが大切です。

ナスナ

ペンペン草ともいうアブラナ科の一年草ですが、三味線のバチに似た果実を耳に近よせてこすり合せると軽い音がするので子どもたちが採って遊びます。

早春の若葉を摘んで浸しもの、和えもの、油いためとして食べることができ、御飯に混ぜてたくと香りがしますがとくにおいしいものではありません。

ゴギョウ（御行〓オギョウが正しい）

ハハコグサともホウコグサともいう路傍に生えるキク科の雑草で、茎葉に白い軟毛を密生してさわるとフワフワして手ざわりがよいもので、粥（カユ）に入れたり茹でて食べたり、餅に入れて母子餅と称して焼いて食べたりされてきました。富士山麓などに多いヤマハハコも同類の植物ですがドライフラワーとしての利用も多く、ハハコグサと同



様に食用とすることができます。

ハコベ（ハコベラ）

庭に植えると厄介なナデシコ科の雑草で地方によってアサシラゲ、ヒヨコグサ、スズメグサとも呼ばれています。

若い葉を摘んで茹でこぼし、浸しもの、油いため、汁の実、和えものとして食用としますが、老成したものは繊維が強く噛み切れません。昔から利尿薬、催乳薬とされてきましたが効き目の成分は不明です。時折ハコベに似て大型で繁茂するウシハコベも雑草化しています。カナリヤなどの小鳥は食べませんがハコベと同様に食用とすることはできません。

ホトケノザ

春の七草でホトケノザという植物はシソ科のホトケノザではなく、キク科の雑草タビラコのことです。

タビラコは田平子とも書くように、路傍に冬から春までの間にタンポポを小さくしたような葉をロセット状に開き、春には一〇センチほどの花茎を立て分枝し径一センチほどの淡黄色のタンポポに似た花を数個つけます。若葉を食用にすることはできません。

シソ科のホトケノザは四〜五月に花茎を数本立てて円坐のような対生葉に紅紫色の唇形花を輪生します。

スズナ

スズナはカブラのこと。七草に数えたカブは現在の改良種のカブのことではなく原種に近いアブラナ科の植物であったにちがいありません。

スズシロ

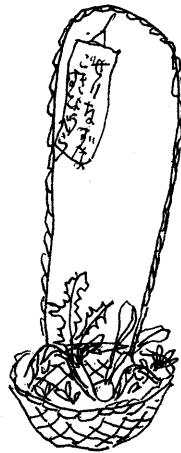
スズシロは今のダイコンの古名です。これも改良されたものではなく古い時代にヨーロッパから中国に伝えられたハツカダイコンの一種であろう

と思われます。

百花園の七草籠

東京墨田区向島の百花園では、毎年正月に七草の会を開き、七草粥を賞味し、土産に七草を植えた籠を提供しています。

百花園の七草籠



七にこだわる習慣

昔から日本でも外国でも七という数を良しとして他の数字より高く評価していたようです。しか

近頃は正、昭和のはじめ頃に歌われた童謡も唱歌も子どもたちには伝えられていませんが、野口雨情、西条八十、北原白秋などがすばらしい歌を残しています。歌ってきかせるだけで子どもたちにはふるさとの良さやひびきが伝えられてゆくのです。長年のうちに歌詞は忘れてもメロディーは頭に残ります。

私など、「……ペチカ燃えろよ、お話しましょ」とか、「歌を忘れたカナリヤは、………月夜の海に浮べれば忘れた歌を思い出す」などいろいろの歌を思い出して口ずさみます。私は八十路の峠が降り坂になっても童心に返ることが出来ることを幸せだと思っています。

一木一草と親しむこころ

春はウメ、スイセン、サクラ、ネコヤナギを、夏は路傍のツユクサやキクイモを、秋はハギ、オ

シロイバナなどと身の周りにある植物を美しいと思ひ、掌にのせて水で揉めば石鹼のように泡立つシャボンソウ、など日本古来の植物も、外国から渡来した多種多様の植物も幼な心にそれがよき友だちとして残るのです。思い出に残るばかりでなくそれを利用して生活をたのしくする工夫も必ず生れてくることを信じていものです。

(園芸研究家)